水辺×まちづくり
堀川の水辺空間活用シンポジウム

日時　平成 23 年 12 月 10 日（土）17:00～19:30

場所　朝日ホール（朝日会館 15 階）

主催　堀川 1000 人調査隊 2010 実行委員会

　　堀川ウォーターマジックフェスティバル実行委員会

　　名古屋都市センター

　　名古屋市

概要

開催内容

第１部　各都市事例紹介・水辺とまちのつながり方

1　大阪の事例…NPO 法人水都 OSAKA 水辺のまち再生プロジェクト　理事　末村巧氏

2　広島の事例…水の都ひろしま推進協議会　事務局
　　広島市都市活性化局観光交流部交流課水の都担当　勢良寛氏

3　東京の事例…BOAT PEOPLE Association　山崎博史氏

第２部　トークセッション・水辺空間の使い方

1　山崎亮氏（Studio-L 代表、京都造形芸術大学教授）講演

2　山崎亮さんと語る、堀川の水辺空間の使い方
　　パネリスト
　　〇山崎亮氏　Studio-L 代表、京都造形芸術大学教授
　　〇丹坂和弘氏　堀川ウォーターマジックフェスティバル実行委員会
　　〇秀島栄三氏　名古屋工業大学大学院准教授、堀川まちづくり協議会委員
　　〇羽根田英樹氏　名古屋都市センター上席調査研究統括監

総合司会　　〇服部宏氏　堀川 1000 人調査隊 2010 実行委員会事務局長

●参加者数　約 150 名

開催記録

あいさつ（服部宏氏　堀川 1000 人調査隊 2010 実行委員会事務局長）

本日は、堀川 1000 人調査隊 2010 実行委員会、堀川ウォーターマジックフェスティバル実行委員会、名古屋都市センター、名古屋市の４団体の協働主催で開催いたしました。

シンポジウムのタイトルに、「堀川×（かける）まちづくり」とありますが、この“かける”というところに、本日のシンポジウムを開催するにあたっての、“思い”が込められています。皆さんは一生懸命堀川での活動に取り組んでいらっしゃいますが、もっともっと堀川を良くしていくために、様々な事例を聞いて、“気づき”を生み出していただくということが、本日の最大のテーマです。そして、気づいたことを“かける”ことで、より大きな成果にしていきたいです。

大阪や広島や東京から来ていただいている皆さんの中には、もうすでに今朝から堀川をずっと歩かれた方もいらっしゃいます。そういった方々の素晴らしい熱意を私たちも受け取り、シンポジウムを有意義なものにしたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

第１部　各都市事例紹介・水辺とまちのつながり方

１　大阪の事例（NPO 法人水都 OSAKA 水辺のまち再生プロジェクト理事　末村巧氏）

北浜テラスの取り組みや、水辺ランチや水辺不動産、水辺 MAP の活動を通じた、市民や沿川地権者等への水辺のまちの魅力や情報発信の取り組みについて発表。

２　広島の事例（水の都ひろしま推進協議会事務局
広島市都市活性化局観光交流部交流課水の都担当　勢良寛氏）

河川河岸緑地のオープンカフェ、市民民間活動との連携、雁木等の親水空間を始めとした川面に向いたまちづくりの取り組みについて発表。

３　東京の事例（BOAT PEOPLE Association　山崎博史氏）

船×αの企画による新しい水辺の楽しみ方や、水面に触れる機会づくり、水辺とまちのつながり、水辺魅力の情報発信の取り組みについて発表。

第２部　トークセッション・水辺空間の使い方

１　山崎亮氏（Studio-L 代表、京都造形芸術大学教授）講演

使う人次第で都市基盤がいかに魅力的な空間になり得るか、また、そのために市民、市民団体、行政は、何を考えて行動しなければならないのかについて講演。

２　山崎亮さんと語る、堀川の水辺空間の使い方

●テーマ１「MOTTO!! イベント」

羽根田氏（司会）　３つのテーマに沿ってディスカッションを進めて行きます。最初に、「イベント」というキーワードについて、堀川でもっとこのようなことができるのではないかという、“とがった気づき”を述べていただきたいと思います。

丹坂氏　堀川というすごい資産があるのに、なぜ使わないのかと切実に感じたことが、イベントを開催するきっかけとなりました。ウォーターマジックフェスティバルは、「堀川の持つ不思議な力」をコンセプトに、堀川が持っている可能性を引き出して行くことを目的としています。舟運の復活、水辺での文化芸術の発信、オープンカフェの実施などを通して、水辺の魅力を知っていただこうと思い、一生懸命取り組んでいます。

秀島氏　水辺からは新しいものが生まれやすく、際どいところ程わくわくするものが生まれてきます。そういったところから新しいものを生み出す人が出てくることを待ち望んでいます。

山崎氏　「水辺×まちづくり」の“かける”が大事だというお話がありましたが、水辺と関係ないと思うことでも、水辺にどう掛け合わせてみるかという発想が必要です。ユニークな食べ物の数々をみてもわかるように、名古屋の人は掛け合わせることが得意です。水辺と何かを掛け合わせ、常にフレキシブルに提案していくことが、少しずつ水辺の活動を認知してもらう、あるいは活動が定着していくことの大きな一歩になると思います。

●テーマ２「MOTTO!! 活用」

羽根田氏　次のテーマは「活用」です。活用することで、イベントとは違い、長期間に渡る使い方が定着していきます。

秀島氏　船で見る視点は、いつもと違うものを感じさせます。舟運を活用することで、いつもと違った景色を感じさせる機会がもっと増えればよいと思います。

丹坂氏　堀川の活用というと、やはり舟運の復活です。名古屋城と納屋橋をつなぐ航路の途中には、円頓寺商店街があり、四間道の古くて良い町並みがあります。川が活用される事により、その沿川の町もどんどん変わっていける可能性があります。色々な人に水面から町を眺めてもらうことで、水辺の使い方のアイデアが出てくるのではないでしょうか。

また、水辺空間の活用を始めたいという方達に沢山集まっていただき、議論する場を作りたいと思っています。そういうところから、堀川を活用していきたいです。

山崎氏　活用には、非日常の活用と日常の活用との２種類がありますが、非日常の回数を増やせば、日常になるということではなく、それらは別のものとして考えていかなければいけません。

日常的に格好よくおしゃれに川を使いこなしている人をどんどん知ること、そして、そういう人達と一緒にイベントを行うことで、日常としても非日常としても、こういう風に水辺を使えるんだという感覚を伝え、広めていくことが大事だと思います。

●テーマ３「MOTTO!! 協働」

羽根田氏　最後のテーマは「協働」です。現在堀川には、地元の方や行政が入った、すごい協議会ができています。そのなかでは、どのような仕組みや、協働の形があったら良いと思われますか。

丹坂氏　ある程度行政に方向性を出してもらった方が、市民としてのまとまりが良いと感じています。名古屋の人は、発想はあっても前にも進めないところがあります。自由な発想がもう少し表に出て、うまく回る仕組み作りができないかなと思います。

秀島氏　今まで産学官民の役割や責任などの話し合いをしてきましたが、今日一番強く感じた事は、誰がやっても良く、やれる人がやるのが一番良いということです。活動している人が集まっているのは、それだけでも非常に楽しいので、義務感でやるのではなく、楽しくやるのが１番だと強く思いました。

山崎氏　　水辺で活動する、水辺で色々な人達とつながっていくということは、もちろん楽しいからやるという事がスタートラインだと思います。この、楽しいからやるということが段々と広がり、それで食っていくことにつながっていく可能性も十分にあると思います。

この種の活動をする時に、大事なことが３つあります。１つ目は、楽しいと感じること、あるいは自分がやってみたいと思うこと。２つ目は、意志。しかし、意志だけでは難しいので、やりたい事とできる事のバランスをとって、活動を進める事が必要です。３つ目は、社会が求めること。つまり、やりたいこと、できること、社会から求められていること、この３つのバランスをとりながら、水辺で活動をしていけば、活動が続いていくし、楽しいし、皆からも感謝されます。この３点を組み合わせて活動することが大事ですし、協働の仕組みを作る時は、この３点をうまくバランスさせるような仕組みが必要です。

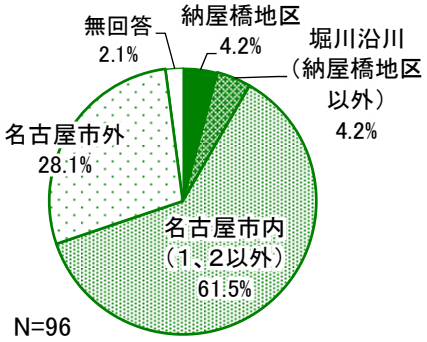
羽根田氏　　堀川は非常に大事な時期に来ています。ここで頑張ると、ブレイクスルーするチャンスが必ず来ると思っています。皆さんと一緒に、もっともっと前に進んでいきたいと思います。

あいさつ（服部宏氏　堀川 1000 人調査隊 2010 実行委員会事務局長）

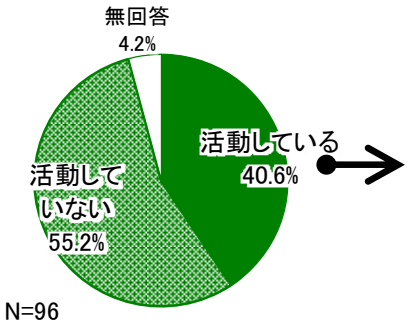
「堀川×まちづくり」として、ここにお集まりの 150 名一人ひとりが、本日の“気づき”を掛け算して、堀川に関わっていくと、ものすごい成果が出ると思います。本日は、誠にありがとうございました。

アンケート結果（回答者：96 人）

○お住まいはどちらですか



○堀川での活動をしていますか



活動の種類
- 市民団体 19 人（48.7%）
- 企業 5 人（12.8%）
- 学校 1 人（2.6%）
- その他 12 人（30.8%）

○堀川の魅力をさらに高めていくため、誰が、何をする必要があると思いますか。　※主な意見を抜粋

- １にも２にも水質の改善。水辺に人は集まります。美しい水辺であれば。
- 新たなコミュニティの形成。新しい発想を持った企画、まちづくり、活動する人の集まる仕掛け。関心を持つ人、関係者が常に集まり、意見の出せる場所（行政のサポート）。
- 周辺企業をもっと巻き込む必要がある。
- 活動があまり知られていない。地道な活動も必要だが、もっと情報を伝える工夫がいるのでは。
- 多くの市民がとにかく何かに関わることだと思う。